はじめに

黄河研究は、2002 年度に開始された競争的研究プロジェクトである RR2002（人・自然・地球共生への革新的研究）における「水文・水資源モデル構築」という課題で、黄河河川流量のモデリングに取り組んだ成果と、地球研内で 2003 年に始まった「近年の黄河の急激な水循環変化とその意味するもの；略称は黄河プロ」から構成されている。平成 18 年度は RR2002 研究では最終年度となり、黄河プロでは５年計画の第４年次となる成果と問題が本研究集会で発表され、熱い議論を行った。RR2002 では黄河流域で展開されている大型の灌漑農地である、青銅峡灌区、河套灌区、位山灌区の実態の主として統計的資料を用いた解析と二次元に展開された水利用効率の研究班と、蒸発現象を引き起こす主因である太陽放射量の長期変化とグリッド降水量データ作成班、そして水文・水資源モデル構築班に分けて資料収集と解析を行った成果が報告された。

一方、黄河プロは黄土高原の長武における土地利用状態が大気と陸面のフラックス形成にどのような影響を及ぼしているかを課題とする名古屋大学地球水循環研究センターの檜山哲哉助教授が主導する大気境界層班、黄河河口のデルタ域における表流水と地下水からの水量と栄養物質量の流入量変動と渤海の一次生物生産量がどのような関係となっているかを探求する地球研の谷口真人助教授の地下水班と九州大学応力研究所の柳哲雄教授が主導する渤海班、社会経済発展と水需要の関係を調べる名古屋大学環境学研究科の井村秀文教授の社会経済班と、これら各班の成果を総合化する、地球フロンティアの馬燮銚研究員に加えて、本年度から中国哲学を専門とする地球研内の木下鉄也教授に、中国 3000 年の書き物から読み解く黄河や水への関心の整理を願った。そして全体のまとめ役として、本研究の総合化と、それぞれの基礎学の連携による問題発見をもくろむ主催者である福嶌という役割で進めてきた。若い研究者達には幅広い課題の理解と、しっかりした解析を要請してきたつもりである。

結局のところ、黄河研究はそれぞれ参画している人たちが面白いと思わなければ、先へは進まないものであるが、プロジェクト研究であるからには、当初に標榜した課題はあと一年間で目処をつける必要がある。今回の研究会では、もちろん未解決な問題もあるが、何が解って何が解らないのかについては課題を共有化できたと思っている。本プロシーディングを読んでいただければ、その一部は理解されるであろうことを願っている。

平成 19 年 1 月 30 日

地球研・黄河プロジェクト代表：福嶌義宏